

「羊と山羊のたとえ」 とマタイの教会観

橋 本 滋 男

³¹人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。³²そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、³³羊を右に、やぎを左におくであろう。³⁴そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。³⁵あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、³⁶裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである』。³⁷そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。³⁸いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。³⁹また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。⁴⁰すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。⁴¹それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ。⁴²あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、⁴³旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである』。⁴⁴そのとき、彼らもまた答えて言うであろう、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか』。⁴⁵そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』。⁴⁶そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう。 (マタイ福音書25章31—46)

マタイはイエスの主要な説教を5つのブロックにまとめる。そしてそれらの説教が終わったところにほぼ同一の文をおいてしめくり、⁴¹ これによって説教から次の物語へ文意をなめらかに移行させる工夫をしている。説教の終りを示

す定形文がマタイの編集によるものであることは、一見して明らかであるが、これら5つの説教群の最後におかれたいわゆる「羊と山羊のたとえ」(25, 31—46)は、マタイの背後にある教会の状況を知る上で有効な手がかりを与えてくれる。本小論は、このペリコーペの研究を通して初期キリスト教の流れの中におけるマタイの教会の位置をたずね、合わせて彼の教会観の一面を学ぶことを目的とする。

I

ペリコーペ自体の釈義に先立ち、これがマタイ福音書において占めている位置を考察する必要がある。上述のように、このペリコーペは5つに及ぶ説教群の第5群の、しかもその最後に配置されている。このあと、例のようにマタイはしめくくりの句をおくわけであるが(26.1)、それは「イエスはこれらの言葉をすべて πάντα 語り終えて…」となっていて、他の4つの場合とは異なり、ここでイエスの教えるべき言葉が「すべて」完了したことを明示する。イエスはそれからいよいよ受難の道を進むのであって、そこに弟子たちとともに最後の晩餐を食する機会があっても、それは教えを説く場面とはされていない。マタイにおいてイエスの説教は25章で終る。このような構成をもつ福音書において「羊と山羊のたとえ」²⁾が受難に突入する直前のイエスの説教の最後であることは、大きな意味をもっている。それはイエスの宣べる福音を聞いた信者たちに対して、イエスの死後、教会の時に於いて、いかに生きるべきかを言い残す言葉となっている。そしてその時々具体的な状況においていかに振舞うかがそのまま終末におけるさばきに直結しているというのであるから、この言葉はイエスの直弟子たちへの教えというより、教会に対して語りかけるという役割をもっている。この点をより強く示すのは、25.32と28.16—20との関連である。「たとえ」において、終末の審判を始めるに当って人の子はまず「すべての国民」 πάντα τὰ ἔθνη を招集する。この語は復活したイエスが弟子たちに与える宣教命令「すべての国民 πάντα τὰ ἔθνη を弟子とし」に対応をもつ。³⁾復活した弟子たちのもとを去るイエスが、不履行のままに終ることになる言葉を残すはずはなく、彼が与える命令は教会の時に於いて実行されねばならない。

こうして全世界に福音が伝えられたとき、終末が到来する。そのことは、すでに24.14におけるイエスの言葉で予告されているとおりであり、ここでも「すべての国民」 *πάσιν τοῖς ἔθνεσιν* への宣教が命じられている。したがってこの個所¹⁾と28.19との間に挟まれた25章において、終末のさばきに招集される「国民」とは伝道者の宣教活動によってすでに福音に接した者のことである。マタイの執筆の時点においては、25章の「たとえ」によって警告を受けるのは、さしあたってマタイの教会であり、すでに福音を伝えられた者としてのマタイ教会に対して彼は貧しい者たちへの行為が終末のさばきに結びついていることを教える。

さてマタイ福音書の全体的構成との関連からもう一つ指摘しておくべきことは、5つの説教群がいずれもその結びの個所で終末のさばきに言及していることである。これはマタイが資料に従ったため偶然そうなったというのではなく、個所によっては文脈からやや唐突に(13.49—51)あるいは編集句によって(18.35.これは6.15にほぼ並行する)さばきのモチーフを持ち出すのであるから、これがマタイにとって大きな関心事であったことがうかがえる。そしてさばきに言及するこれらの個所において、いくつかの言葉が25.31—46に対応をもつことも見逃せない。たとえば7.22—23では、イエスにむかって「主よ」という者がかえって「わたしのところから行ってしまえ」 *ἀποχωρεῖτε ἀπ' ἐμοῦ* と拒否されるが、25章でも同様に「主よ…」と尋ねかける者に対して「わたしから離れよ」 *πορεύεσθε ἀπ' ἐμοῦ* と命じる。10.42 「この小さい者のひとり」と「水一杯でも飲ませてくれる者」の句は、25.40, 35において「これらの最も小さい者のひとり」、「かわいていたときに飲ませ」となっている。13.49 「世の終り」は25.34 「世の初めから」に逆対応しているといえるであろうし、「義人 *δίκαιοι* — 悪人 *πονηροί*」(13.49)の組合せは、「正しい者」 *δίκαιοι* (25.37)、「のろわれた者」 *κατηραμένοι* となっている。そして悪人が投げ込まれる「炉の火」 *εἰς τὴν κάμινον τοῦ πυρός* 13.50 は、25.41 「永遠の火」 *εἰς τὸ πῦρ τὸ αἰώνιον* の句に対応する。25章の「たとえ」とそれに先立つ個所においてこれら類似の語句が使用されているのは、結局のところ終末のさばきについてのイメージが共通しているためとも考えられるが、しかしマタイが先行

個所での用語ないしそれとの類似語を25章でできるだけ拾い上げて綴っているという可能性は否定できない。つまり25章の「たとえ」は先行の4つの説教群の結び部分で与えた警告を含む教えであり、⁵⁾ これを語ることによってイエスは「すべて」(26.1)の教えを完了するのである。

II

25.31—46の真正性は、結論的にいえば、否定的に判断される。このペリコーペは内容的に見て、(A)31—33節、人の子によるすべての国民の選別、(B)34—46節、王によるさばき、という二つの部分からできている。そして2つの間に、選別という基調を別にすれば、「右、左」の語のほかとくに共通するものはなく、行為者も(A)の「人の子」が急に(B)では「王」に変わる。(A)は「たとえ」的要素を保持しているが(32b-33節)、(B)は本来の意味での「たとえ」とはいえず、寓喩的解釈を施されているもの(「毒麦のたとえ」13.24—30, 36—43, 「種まきのたとえ」マルコ4.1—9, 13—20)とも異なる性格をもつ。むしろ(B)は黙示的イメージを背景にした倫理的範例である。したがって(A)と(B)は伝承史的に別の起源をもつと思われる。

まず(A)について考察すると、冒頭の31節は以下のような理由でマタイの編集句と判断される。第一に、この節は16.27, 19.28にほぼ同じであって、これらの個所から素材を得ていると思われる。さて16.27はマルコ8.38の並行句であるが、両者を比較してみると、マタイで人の子の来臨が強調されていることがわかる。マルコにおいて人の子の来臨は、主文のあとに *ὅταν* に導かれた従属文で述べられているのに対し、これを資料にしたマタイ16.27では、人の子の来臨を主文とする。そしてマタイは、人々に「報い」を与えるために「来臨」があると述べる。この2つのモチーフの結合はマタイ的であって(13.40—42, 24.30)、共観福音書では他に見出されない。そのことは、25.34以下の説話部分でのテーマ「終末における報い」もマタイによることを強く示唆する。マルコにおいて人の子が拒否されるのは「わたしとわたしの言葉を恥じる者」であるが、マタイは終末における報いの基準を「実際の行いに応じて」と改め、信仰者の行為を重視する。このモチーフも、25.34以下に具体的なテーマをあげ

る形で展開している。マルコとの比較からさらに指摘され得ることは、マルコの伝承では「父」のものである栄光や天使がマタイにおいて徐々に「人の子」のものに移されていくという傾向である。⁶⁾ マタイ16.27「彼の天使」 τῶν ἀγγέλων αὐτοῦ の「彼」とは、直前の「父」ととることも可能であるが、しかしこの文の主語である「人の子」の意に解するのが自然であろう。人の子が天使を従えるというイメージは、マタイではすでに13.4（毒麦のたとえの解釈）に見られ、終末について述べた24.31にも見出される。⁷⁾ また人の子が終末において「栄光」を伴って出現するとか「彼の栄光の座」につくという表現も、マタイ個有のものであって他の共観福音書にはない（19.28.⁸⁾ 24.30）。つまりマタイは、マルコやQに比し、人の子の宗教的地位を強化するが、同時にその権威を高めている。すなわちマルコ（8.38）やQ（12.8）では人の子は終末のさばきにおける告発者の役割にとどまるが、マタイでは審判者として振舞う。このようにすでに25章以前において人の子の地位と権威は高められているが、25章のペリコーペの主人公はまさにそうした権能をもつ存在として登場する。25.25—31に関する以上の分析は、単にこの節がマタイの作というのみでなく、これに導かれたペリコーペ全体の真正性にも強い疑問を投じる。⁹⁾

(B)の分析に当たってまず注目されるのは、34節において「王」が「わたしの父に祝福された人たちよ」と語りかけることである。マタイ福音書のイエスはしばしば神を「わたしの父」と称するので、¹⁰⁾ ここでもこれはマタイの文体であると考えてよい。この語りかけは、話者である「王」とはイエスであり、さらに遡って31節の「人の子」と同定されていることになる。終末時に到来する人の子をイエスと同定するのは史的イエスに由来し得ず、伝承の新しい層において認められる傾向であって、ことにマタイにおいてこれが著るしい。¹¹⁾ そのことは、31節の真正性についての上述の判断を強化する。31節の考察に関しては、たとえに王を登場せしめるのはマタイ的特色であることを挙げておく。25章のペリコーペ以外で共観福音書のたとえ話に王が現われるのは4回にすぎないが、そのうち3回はマタイに集中している（18.23, 22.2, 11）。しかもあとの1回（ルカ14.31, 戦争の前に熟慮する王のたとえ）において「王」がたとえ自体にとって不可欠の物語要素であるのに対し、マタイの3回の例ではたとえの内容

から見て「王」が登場せねばならない必然性は乏しい。その点は、25.34の「王」においても同様である。ところでマタイにおけるこれら3つの個所を25.34と比較してみると、前者でいずれも王とは神を示唆しているのに対し、25章では人の子としてのイエスである。つまりここでも終末において再臨する人の子イエスの地位の昇格をはっきりと見出されるのである。本来神の職務であるさばきを神に代って行う王イエスは、祝福された人々に「王国」を与えることになるが(34節)、人の子が「王国」を所有するというのもマタイ的である(13.41, βασιλείας αὐτοῦ)。

このほか多少ともマタイ的特色をもつ語句を列挙すると、ほぼ以下のようなものである。「そのとき」τότε(31, 37, 40, 47節),¹²⁾「さあ」δεῦτε(34節),¹³⁾「正しい者」δίκαιοι(37, 46節)、終末のさばきにおいて救われる者を οἱ δίκαιοι と称するのはマタイのみ(13.43, 49),¹⁴⁾「永遠」αἰώνιοι(41, 46節)を神による処罰を結びつけて用いるのはマタイ的表現である(18.8),¹⁵⁾「火」πῦρ(41節)を終末の審判のイメージに用いるのは黙示的表象において一般的であったと思われるが、Qに記された洗礼者ヨハネの言葉以外で、審判の「火」への言及はマタイに多い。¹⁶⁾ これらのマタイの特徴を帯びた語句が(B)に数多く見出されることは、少くとも(B)がマタイによって相当に加工されていることを意味する。それが地の文に多く、会話部分には乏しいので、マタイは(B)の素材を伝承から得たとする可能性もあながち否定できないが,¹⁷⁾ いずれにせよマタイはきわめて具体的な例を通してキリスト者がいかに行うべきかを語るのであって、彼がこうした警告を教会にあてて発せねばならなかったことは、逆にその教会の問題性を反映しており、そしてそれに対するマタイの対策——教会観——を示している。

III

人が終末のさばきにおいて祝福を受けるか禍いを宣告されるかの基準は、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとり」に対する振舞いである。それでは、さばきに関してそれほどの決定性をもつ「最も小さい者」とはだれのことか。この問題の考察に当たって、25.34以下と著るしい共通性をもつ10.40,

42「あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをおつかれしになったかたを受け入れるのである……わたしの弟子であるという名のゆえに、この小さい者のひとりに冷たい水一杯でも飲ませてくれる者は、よく言うておくが、決してその報いからもれることはない」との比較から、必要な手がかりが得られる。この個所は、マルコ9.37b、41を資料にしているが、マルコにおいて2つの別個のペリコーペに織り込まれている言葉をマタイはもとの文脈から切り離して組合せ、神（遣わす者）—イエス—弟子たち—受入れる者、の段階的構造を明確にし、弟子たちを受入れる者に与えられる報いを約束する。さてこれと25.34以下との2つの個所は、ともにマタイのまとめた説教群の結びでおかれているということのほか、これらがイエスの別れの説教になっているという共通性がある。10章は、イスラエルに福音を伝えるため弟子たちを送り出すときの別れの言葉であり、25章はイエスの最後の説教である。この言葉を受けて弟子たちは「すべての国民」への伝道に出発する。そして10章において、宣教中の弟子たちが経験するであろう苦しみ（渇き）が予告されているように、25章でも世界伝道が完了するまでに弟子たちが受ける事態を語っていると考えてよい。10.42においては、水を与えられる「小さい者」とは弟子であると明示され、彼らを受入れることはイエスを受入れるに等しいといわれる。同様に25章でも「最も小さい者」に水を飲ませるといふ行為が言及され、この「最も小さい者」がイエスと同定される。こうした10章との共通項から、われわれは25章の「最も小さい者」をイエスの弟子たち（伝道者）と見なし得る。マタイは「伝道」という場面において、2つの人物群を考える。1つは伝道する者であり、これはイエスと同等のものとして受入れられることを要求し得る。他は伝道者を迎える側で、たとえ水一杯であってもその労を正当にねぎらうなら、それにふさわしい報いを与えられる（10.42）。同じことが25章の「たとえ」にもあてはまるのであって、「すべての国民」を招集してさばきが開かれるが、この「すべての国民」には実は「最も小さい者」は含まれていない。ここでも伝道者とこれを迎える「すべての国民」の2グループが区別され、前者は後者への振舞いによってさばかれるのである。

さて「最も小さい者」が通常の経済的意味における貧者一般でなく、伝道者

であるという理解は、さらに次の考察によって強化される。第一は、イエスが「最も小さい者」を「わたしの兄弟」と呼ぶことである。「兄弟」ἀδελφόςが、語の本来の意味である血縁上の兄弟を指す例はマタイにも多いが(1.2, 11, 4.18など)、それ以外で、とくにキリスト者を指すと思われる用例がマタイ個有の文に多く見出される(5.22—24, 7.3—5, 18.15, 21)。この関連で重要な示唆を与えるのは、12.49—50である。その資料であるマルコ3.34においては、イエスは彼を取り囲んでいる群衆のことを「わたしの兄弟」と呼ぶが、マタイの並行箇所でははっきりと弟子たちに限定されている。つまりマタイでは弟子(キリスト者)でなければイエスの兄弟とはいえない。28.10において復活したイエスが弟子たちを「兄弟」と呼ぶのも、こうした考えに立つ用法である。であるからマタイがとくに教会の正しい運営について論じる18章において、教会員を兄弟と記すのはもっともなことであろう(18.15 (bis), 21, 35)。25章でも、飢え渴き、裸で病気に苦しむ者とはキリスト者であって、単なる貧乏人のことではない。第2は「最も小さい者」ἐλάχιστοςという呼称である。たしかに人に対してこの呼び方を付するのは25章以前にはなく独特な名称である。しかしその原級である「小さい者」μικρόςは25章以前において「弟子」(あるいは広くキリスト者)を意味する語として用いられている。10.42についてはすでに触れたが、18.6—14もここに挙げられ得る。¹⁸⁾ 18章は、弟子たちの中でだれが一番偉いかという議論で始まる。マルコ(9.34)では現実における弟子たちの秩列が問題となっており、これに対してイエスが幼な子を例にして彼らをたしなめるという文意であるが、マタイは弟子たちの問題を「天国」での秩序と書きかえ、マルコ10.15を利用して(マタイ18.3)幼な子のようになることを天国に入るための条件とする。すなわちマタイにおいて救われることとは幼な子のようになることに他ならない。この文脈において「わたし¹⁹⁾を信じるこれらの小さい者」(18.6)とは、具体的な幼児でなくキリスト者の呼称である。²⁰⁾したがってマタイが「失なわれた羊」のたとえの結びに「小さい者」の減びを戒めるのも(18.14)、教会から1人の信仰者をも脱落させてはならないという教会運営についての訓戒である(18.10も同様)。このようなマタイ的な μικρόςの用法から考え、25章の「最も小さい者」も同義に解釈することが妥当である。²¹⁾

25章でとくに最上級の ἐλαχιστος が用いられているのは、飢え渴きみすばらしい身なりをした伝道者こそが実はキリスト者のあるべき姿であるというマタイの現想が投影されているのであろう。それは自らを「低くする者」が終末において高くされるという逆説（23.12）をこめた呼称であると解し得る。²⁵¹

結局マタイは、終末におけるさばきの基準を愛の行為にみるというのみでなく、とくに伝道者に対しての行為を重視するわけである。それはキリストからつかわされた者はキリストの行うべきことを代行し、²⁵¹ その意味ではキリストであるからであるが、被派遣者に派遣者と同等の権威を認め、両者を同定するという考え方はユダヤ教の伝統に根ざしている。この観念を最もよく表わす語は שַׁלִּיחַ shaliah（使者）で、これは「送り出す」 שָׁלַח という意味の語から派生しているが、後期ユダヤ教において派遣そのものや派遣において与えられる使命よりも送り出される者のもつ権威を主に含意するようになった。使者は派遣者の権威をもつゆえに使者として受入れられることを要求し得るし、それが使者の法的宗教的資格の根拠となっている。「送り出された者は送り出した人自身と同じである」（Ber. 5. 5）というラビの言葉は、こうした考えを簡潔に示している。犠牲を献げる祭司が神から任命された使者と称されたことも、この観念に立っている（b. Kid. 23b, Yoma 19ab）。

このような背景をもつのであるから、伝道者にキリスト（あるいは神）に匹敵する権威を認める思想は、マタイに限らず初期の教会に広くあったと考えられる。たとえばパウロは一般の信徒が伝道者を厚くもてなすべきことを教えるが、²⁵¹ そこには単に経済的配慮に立って待遇を問題にしているのではなく、彼自身がキリストの代理人として行為しているという自覚が作用していると思われる。彼は彼の教えを神の言葉として受取られることを期待し（テサロニケ第1. 2.13）、²⁵¹ 教会への忠告を「主の命令」と宣言する（コリント第1.14.37）。²⁶¹ ガラテア6.6—7において一般の信徒が伝道者を物質的に援助することをすすめる文脈において「神を侮ってはならない」と警告するのも、伝道者への態度が神へのそれと何らかで結びついているという考えを根底にしていると見てよい。マタイ25章の「最も小さい者」への愛が終末のさばき——救われるか否かの決定——に直結するという「たとえ」も、その要点は愛のすすめというより伝道

者に対する態度であって、その対象が伝道者——キリストの代理——である故にこそ彼らへの振舞いが救いに決定的なのである。²⁷⁾

IV

「たとえ」において伝道者は、飢え渴き、衣類ももたず宿なしであり、投獄される。これはマタイ教会を訪ねる放浪伝道者の姿である。ユダヤ教において愛の行為として旅人をもてなすことを挙げる例はあるが、獄中にある者を見舞うというのではなく、²⁸⁾ 他方、投獄はキリスト教の伝道者がしばしば経験せねばならないことであった。²⁹⁾ 彼らは安住の地を求めず、自らの生活を支える手段さえもたず、迫害されては他の町へ移るといふ放浪の旅を続けながら福音を伝えたのであった。彼らの姿はみすばらしく、その語る言葉に耳を傾ける者も少なかったであろう。教会さえも時として彼らを冷淡に扱ったであろうことは、25章の「たとえ」から十分に推測できる。安定した生活を営む教会から邪魔者扱いにされることもあり、わずか「水一杯」の授受ですませるといふのも誇張ではなかったと思われる。しかしパレスチナからシリアにかけてかなり後代に至るまでこのような禁欲主義的放浪伝道者が活動していたことは、新約以外の文書によって確かめられる。³⁰⁾ 有名なのはディダケーであるが、「君たちのところへ来るすべての使徒を主のように (ως κύριον) 受入れなさい」(11.4)、「主の名において来る者を、すべて受入れなさい」(12.1)、「わが子よ、君たちに神の言葉を語る人を日夜憶え、その人を主のように尊敬しなさい」(4.1)と述べ、遍歴する伝道者に対しキリストと同じ敬意をもって迎え入れることを教え、さらに経済的援助をすすめる。「貧乏の人を見放してはならない。君の兄弟とすべてのものを分け合いなさい……君たちが朽ちざるものについて分け合うのであれば、朽ちゆくものについてはなおさらではないか」(4.8)。この禁欲主義的放浪伝道者の伝統は2世紀のパピアスの時代にもあり、³¹⁾ その後も偽クレメンス文書³²⁾ やトマス行伝、³³⁾ さらに4世紀の使徒憲章にまでうかがえる。ディダケーで教会の維持の上で大きな問題となっているように、1世紀末には教会を転々と食いものにする悪質な偽預言者が現われ、教会はその識別のルールを作らねばならなくなるが、この問題はすでにマタイにおいても避けて通れなくなっている

(7.15—23)。³⁴⁾しかしマタイにおいては、まだディダケーの時代ほど深刻でなく、吟味の方法もディダケーのように細かく確定していない。むしろマタイでは放浪伝道者をもてなすことが終末の救いに関わるというほどに彼らをきわめて重視し、彼らをキリストと同一視する。それはマタイが彼らにキリスト者の生の理想を見たからである。

マタイは彼らを「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者」と呼ぶ。「兄弟」、「小さい者」がキリスト者を指すことは上述のとおりであるが、キリストに代って教会の指導に当る伝道者をとくに最上級の形 *ἐλάχιστος* で表わすのは、指導者こそ「最も小さく」あるべきだというマタイの教会観に基づくのであろう。彼の教会の内外には、与えられたタラントの相違に応じて、預言者、知者、律法学者があり、³⁵⁾ それぞれがともに教会に仕える者であったが、80年代にはこうした職能の相違が階級的区別に分化しつつあった。³⁶⁾ マタイはこの傾向に危険な兆候を認め、教会の中ではすべて等しく「兄弟」であることを強調する(23.8)。教会の中に先生 *ραββί, διδάσκαλος, πατήρ* 教師 *καθηγητής* はあってはならず、指導者は仕える者、自らを低くする者でなければならない。マタイの構成する第5の説教群(23—25章)が教会の職階的傾向への警告で始まり(23. 2—12)、最後のペリコーペで伝道者を「最も小さい者」と呼ぶのは偶然ではない。³⁷⁾ 教会が制度化し精神的に自立し、こうして外からやってくる伝道者を迎え入れる余地をなくすなら、それは教会にとってマイナスとなろう。マタイは放浪伝道者をキリストとして受入れることをすすめ、それを教職制批判の文脈の中で述べている。³⁸⁾

注

- 1) *καὶ ἐγένετο ὅτε ἐτέλεσεν ὁ Ἰησοῦς τοὺς λόγους τούτους.* 7.28, 11.1, 13.53, 19.1, 26.1
- 2) このペリコーペ全体を「たとえ」と称するのは適当ではない。「たとえ」に当るのは32—33節にすぎず、35節以下は範例というべきものである。しかしここでは慣例的に「たとえ」と記す。
- 3) 25.32でも28.19でも、中性の *τὰ ἔθνη* がその前後の文脈で男性代名詞 *αὐτοῦς* で受け継がれているという文法的不統一が共通して見出されることも、この2つの個所の対応関係を示唆する。cf., J. R. Michaels, "Apostolic Hardship and Righteous

- Gentiles, A study of Matthew 25. 31—46, "Journal of Biblical Literature, 84 (1965) p. 28.
- 4) 24. 30 は終末における人の子の出現という文脈で「すべての民族」*pâσαι ai̇ φυλαί*に言及する。U. Wilckens, "Gottes geringste Brüder Mt. 25. 31—46," *Jesus und Paulus. Festschrift für W. G. Kümmel*, 1975, がこの個所と 25. 32 「すべての国民」を同一に理解するのは正しい。
 - 5) 第1群(7. 15—23)ではイエスに向かって「主よ」と呼ぶ者(すなわちキリスト者)がすべて正当な信仰者なのではないことを述べる。つまり信仰者の群(教会)の中に不適当な者も混在しているというモチーフ(*corpus mixtum*)で、これは第3群(13. 49)にも見られ、25. 44 「主よ…」に連なる。もう1つ、現在の愛と未来のさばきを結びつけるモチーフは第2群(10. 42), 第4群(18. 35)を経て25. 34—46の「たとえ」に連なる。
 - 6) J. A. T. Robinson, "The 'Parable' of The Sheep and Goats," *Twelve New Testament Studies*, 1962, p. 79.
 - 7) 人の子は「彼の天使をつかわして」*ἀποσπελεῖ τοὺς ἀγγέλους αὐτοῦ*(並行句マルコ13. 27には*αὐτοῦ*がない)。なおQ(ルカ12. 85.)においても天使は神に所属する。
 - 8) ルカ22. 28—30を比較せよ。
 - 9) J. A. T. Robinson, op. cit., p. 87は、32—33節の選別のたとえを13. 24—30(毒麦のたとえ)、13. 47—48(魚網のたとえ)と同じ趣旨のものとして解する。つまりもとは農業、漁業、牧畜を素材にした3組のたとえであったと考え、その線上で「たとえ」の復元を試みている。
 - 10) マタイに16回、マルコに4回、ルカに4回。マタイの16回のうち、25. 34を含め15回までマタイによる編集的変更部に見出され、「神」を「わたしの父」におき替える傾向が顕著である(26. 29とマルコ14. 25)。さらにマルコ10. 40「備えられている」*ἡτοιμασται*の受動態は行為者としての「神」を避けたセム語的用法と考えられるが、その並行句マタイ20. 23は「わたしの父によって」を付加している。
 - 11) Q(ルカ6. 22, 12. 8)では「人の子」を語る個所が、マタイ(5. 11, 10. 32)では「わたし」とされている。マルコ資料の取扱いにも同様の例がある(マルコ8. 31, 並行句マタイ16. 21)。こうしてマタイでは人の子=イエス、の定式が確立しているので、逆に他資料が「わたし」というところをあえて「人の子」と述べることも可能となる(マタイ16. 13)。
 - 12) マタイ、90回、マルコ、6回、ルカ、15回。
 - 13) マタイ、6回、マルコ、3回、ルカになし。
 - 14) J. A. T. Robinson, op. cit., p. 84 「25章においてこれ(「正しい人」)は物語自体から出てくる名称ではない」というのは正しい。
 - 15) ただし、マルコ3. 29。
 - 16) マタイ、7回、マルコ、2回、ルカになし。
 - 17) J. A. T. Robinson, op. cit., pp. 87ff. 彼の欠点は、35節以下の伝承部分の復元に当

ってマタイ10,42を手がかりにしていることである。彼はこの個所がマタイによる文でないかどうか十分な吟味をしていない。なおマタイが伝承を入手したことが確認されても、それがイエスに遡るかどうかは自ずと別問題である。

- 18) G. Barth, "Das Gesetzesverständnis des Evangelisten Matthäus," *Überlieferung und Auslegung im Matthäus-Evangelium*, 1960. S. 113.
- 19) マルコ9,42では「信じる」のあとに「わたしを」 *εἰς ἐμέ* を欠く。これを入れるのはマタイである。
- 20) L. Cope, "Matthew 25.31-46, 'The Sheep and the Goats' Reinterpreted," *Novum Testamentum*, 11 (1969) p. 39.
- 21) O. Michel, *μικρός*, *Theologisches Wörterbuch zum N. T.*, VI, S. 657. E. Schweizer, *Matthäus und seine Gemeinde*, 1974. S. 158. なおユダヤ教でこれに近い例は, Baraita. Num. R. 14.4(174a)「人がイスラエルの最も小さい者の口から(律法の)言葉を聞くなら, イスラエルの最もすぐれた者から聞くかのように聞くべきである……すぐれた者から聞くかのようにというのみでなく, 最もすぐれた者から聞くかのように(聞くべき)であり, すぐれた者から聞くかのようにいうのみでなく, サンヒドリンから聞くかのように(聞くべき)であり, サンヒドリンから聞くかのようにというのみでなく, モーセから聞くかのように(聞くべき)であり, モーセから聞くかのようにというのみでなく, 神から聞くかのように(聞くべき)である」。
- 22) U. Wilckens, *op. cit.*, は, 25章におけるさばきは愛の行為の有無が基準となっていて, その対象がだれであるかはとくに問題になっていないと強調する。そして45節の「最も小さい者」に「わたしの兄弟」が付けられていないことに注目し, この「小さい者」とはすべての貧者を意味すると考える。彼の説は, 愛の行為をすすめるユダヤ教の一般的な教説とマタイの「たとえ」との比較ではすぐれているが, 「最も小さい者」の同定について十分な論拠を得ていないと思われる。
- 23) マタイ12, 50参照。弟子がイエスの兄弟と称されるのは, 父のみこころを「行う」からである。
- 24) テサロニケ第1,5,12-13, ガラテア6,6, コリント第1,16,15-18, ピリピ2,29.
- 25) さらにガラテア4,14も同様の考え方を背景にして把えることが許されるであろう。
- 26) コリント第1,7,12, 25は自らの見解と主の言葉を区別しているが, これは問題がより倫理的な場合であるからとも思われる(コリント第1,7,40も参照)。
- 27) ユダヤ教での類似文「わたしの子らよ, 君たちがもし貧者に食物を与えるなら, わたしはそれを, 君たちがわたしに食物を与えたかのように, 君たちの勘定につける」
Midr. Taan. 15,9, E. Schweizer, *Das Evangelium nach Matthäus*, NTD 2, 1973, S. 311 と比べ, マタイでは「あたかも……かのように」ではない。これはマタイにおいて貧しい者がキリストと同定されているからである。
- 28) J. Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 1970, S. 205.
- 29) マタイ10,17f., 28, マルコ13,9ff., コリント第2,6,5, 11,23, ヘブル11,36.
- 30) パウロは自分の伝道根拠地となる教会をもっていて, 時に応じて旅に出るのであるか

ら、その点、マタイのというような放浪伝道者ではない。しかし彼が旅行で経験した苦勞には（コリント第2.11.23—29）、マタイ 25.35 と共通する語が見出される。

- 31) 「主の弟子」と称する放浪伝道者の保持する伝承をパピアスは積極的に採取した。
Eusebius, *Historia Ecclesiastica*, III, 39.4.
- 32) 偽クレメンス書から、3世紀に厳格な性的禁欲生活を守る男女が放浪しながら各地の教会で悪霊を追放し信徒のとりなしの祈りを行い福音を伝えたことが知られる。cf., E. Schweizer, *Matthäus und seine Gemeinde*, S. 167, G. Kretzmar, "Ein Beitrag zur Frage nach dem Ursprung frühchristlicher Askese," *Zeitschrift für Theologie und Kirche*, 61(1964), 32—39.
- 33) トマス行伝145, 「主よ、わたしはあなたの命令を果し、あなたのみ心を行いました。わたしは貧しく無一物となり無視され、放浪者、奴隷、囚人となり、飢え渴き裸で素足、あなたのために労してきました。あなたへの信頼がくずれ希望がくだかれることのないためであります。こうしてわたしの大きな苦勞が空しくならずわたしの辛苦が無駄にならないためであります。どうかわたしの祈りと不断の断食が、あなたへのわたしの熱意が、くじけませんように」。
- 34) 角田信三郎「ワンダーラディカリズムとマタイ福音書」、聖書学論集12.1977は、定住教団の側に立つマタイとワンダーラディカリズムの実践者との宗教的社会的エートスの位相を見事に把え、両者に相互依存関係を見出し、これを代償・代賞の関係と解している。この見解はマタイの教会の社会的側面と愛の実践要請の神学的根拠を正しく探り当てている。
- 35) 11.41, 13.52, 23.34.
- 36) H. Frankemölle, "Amtkritik im Matthäus-Evangelium" *Biblica* 54 (1973) 247—62, E. Schweizer, *Matthäus und seine Gemeinde*, S. 160.
- 37) マタイには教会的関心はきわめて強いが、しかしルカの牧会書簡的職制は見られない。マタイによれば、2・3人が集まるところにキリストが現在し、それが教会なのである（18.20）。
- 38) 本小論の範囲をこえるので詳説は避けるが、この問題に関して一言付しておくべきことは、マタイ福音書においてペテロの權威が一見して感じられるほどには実は強調されていないことである。16章においてイエスはペテロの信仰告白を積極的に評価し、彼を「さいわいだ」とほめる。しかしその告白は彼の個人的功績というより、啓示を与えた「わたしの父」のおかげにすぎず（16.17）、ペテロに与えられる特権はそのまま教会に与えられる。19.27で、ペテロは自らの功績を主張し、神から受ける祝福を尋ねようとするが（ペテロの質問はマルコにはない）、これによって彼はゼベダイの子らと同じくイエスの真意を理解していないことが示唆される。復活ののちもペテロは特別扱いされていない（28.7, マルコ 16.7ではペテロを指名）。他方たしかにマタイにおいて彼の優位性は保持されている（とくに 17.27 「わたしとあなたのため」）。したがってマタイはペテロに関してバランスをとろうとしているように見える。少なくとも「ペテロ」によって教会が職階化される方向へ進むことにブレーキをかけようとして

いると考えられる。